

日本ロレンス協会第56回大会プログラム

- ◎日時： 2025年6月21日（土）、22日（日）
◎会場： 國學院大學 渋谷キャンパス
教室未定。追って事務局から全体メールにて連絡します。
住所： 〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28
連絡先： 國學院大學文学部 上石田麗子
Tel: 080-4793-0604
e-mail: kamiishida@kokugakuin.ac.jp

◎交通アクセス：

■ 渋谷駅からのアクセス

渋谷駅（JR各線・地下鉄各線・東急各線・京王井の頭線）から徒歩約13分
渋谷駅（JR各線）新南改札から徒歩約13分
都営バス（渋谷駅東口バスターミナル54番のりば 学03日赤医療センター前行）
「国学院大学前」下車
（運賃180円・IC178円）【渋谷駅から3番目の停留所、所要時間約10分】

■ 表参道駅からのアクセス

表参道駅（地下鉄半蔵門線・銀座線・千代田線）B1出口から徒歩約15分

■ 恵比寿駅からのアクセス

恵比寿駅（JR山手線・埼京線・湘南新宿ライン、地下鉄日比谷線）から徒歩約15分
都営バス（恵比寿駅西口ロータリー1番のりば 学06日赤医療センター前行）「東四丁目」下車
（運賃180円・IC178円）【恵比寿駅から3番目の停留所、所要時間約10分】

※國學院大學には駐車場・駐輪場はありません。

車でお越しの方は、大学施設外の近隣パーキングをご利用ください。

◎昼食のご案内： 渋谷駅から明治通り沿いに飲食店、カフェがいろいろあります。

◎宿泊のご案内： プログラム最後に宿泊施設をリストにして掲載しました。

【役員会】

大会前々日（予定）にオンライン(Zoom)で実施します。

【大会1日目】 6月21日（土） 13:00～

受付： 12:30～

総合司会： 上石田 麗子（國學院大學准教授）

◎ 開会の辞： 会長 石原 浩澄（立命館大学教授）（13:00～）

研究発表

(13:10~14:20)

司会 福田 圭三 (大阪経済大学講師)

Miriam as Medium: *Sons and Lovers* における色彩の修辞学

菅田 泰平 (成蹊大学大学院生)

司会 木下 誠 (成城大学教授)

「虹」を架ける——ロレンスはどのように形而上学を動かすか

鳥飼 真人 (高知県立大学教授)

*休憩 (14:20~14:30)

シンポジウム 1

(14:30~17:00)

〈日本オーウェル協会・日本ロレンス協会 合同シンポジウム〉

オーウェル、ロレンスと政治

司会 高村 峰生 (関西学院大学教授)

ジョージ・オーウェル『空気を求めて』と D. H. ロレンスの小説
——階級問題と共産主義

講師 近藤 直樹 (日本大学教授)

D. H. ロレンスとジョージ・オーウェル
——政治といふ営みに対する態度

講師 大江 公樹 (早稲田大学非常勤講師)

トランプ時代にジョージ・オーウェルとジェイソン・スタンリーの
ファシズム論を併読する

講師 高村 峰生 (関西学院大学教授)

*休憩 (17:00~17:05)

◎ 総会 (17:05~17:35)

◎ 懇親会 (18:00~20:00)

場所: メモリアルレストラン (渋谷キャンパス 3号館 2F)

会費: ¥5,000 (大会当日受付でお支払いください)

【大会 2 日目】 6 月 22 日（日） 10 : 00～

シンポジウム 2 (10 : 00～12 : 30)

E. M. フォースターと D. H. ロレンス

司会 加藤 彩雪（大妻女子大学准教授）

フォースターとロレンスの創作上の一致
——意識の終末世界に視える女性の表象について

大山 美代（近畿大学講師）

E. M. フォースターとモダニズムの展開における位置
——“the old stable ego” の先にあるもの

加藤 彩雪（大妻女子大学准教授）

E. M. フォースターのゲイ・ナラティヴと D. H. ロレンス

田島 健太郎（九州工業大学講師）

※コメンテーター 田中 雅子（九州共立大学講師）

◎ 閉会の辞： 副会長 木下 誠（成城大学教授）

Miriam as Medium: *Sons and Lovers* における色彩の修辞学

菅田 泰平

ポールの父親であるウォルター・モレルは“his mouth very red in his black face”とあるように「黒」と「赤」の色を持つ人物である。彼が炭鉱労働者である事、また自宅での鍛冶仕事の場面で「火」との関わりが描写されることから、彼の人物像は「石炭」と結びつくと考えられる。本研究ではウォルターと同じ「黒」と「赤」の色を持つミリアムもまた「石炭」と結びつく人物である点、そして彼女がポールを取り巻く人間関係の媒介となっている点に注目する。ミリアムによって影響を受けたポールの人間関係として、ミリアムの兄であるエドガーとクララ・ドーズとの関係が挙げられる。第9章におけるポールとエドガーの共同作業の内容が石炭の運搬である点、第12章のクララがベストウッドを訪問する場面では蒸気機関車を利用している点から、石炭とミリアムはポールの男女両方との人間関係の媒介であると考えられる。第10章にてミリアムと交際するポールの行動が敬虔なクリスチャンであるガートルードの目に“which is a form of slow suicide”として映ったのは、石炭と結びつくミリアムの存在を媒介にして、女性との heterosexual な関係だけでなく、男性との強い結びつき(homosocial もしくは homosexual)を構築するポールの行動が宗教的な自殺と結びつくためであり、このことからミリアムはポールの男との同性間関係の媒介となると考えられる。

「虹」を架ける——ロレンスはどのように形而上学を動かすか

鳥飼 真人

キルケゴールとニーチェはともに「形而上学を始動、活動させようとした」というドゥルーズの洞察は、両哲学者と深い関係にあるロレンスが芸術創作を通じて形而上学をどのように始動、活動させるのかという問いに我々を引きつける。この問いを考えるために不可欠なのが、「虹」という用語の哲学的概念である。この概念は単に『虹』の物語を成立させるためだけでなく、『息子と恋人』の物語においてロレンスが形而上学を「始動」させることを可能にする要因でもあったと考えられる。本発表ではまず『息子と恋人』の物語を、ポールが旧来の哲学的〈意志〉の超克としての新たな〈意志〉(力への意志)を感得する物語であるという解釈を示し、その新たな〈意志〉(反復)と「虹」との密接な関係へと議論を展開することで、この小説においてロレンスによる形而上学が「始動」する様を捉える。続いて、『虹』の物語の完成要因と目される『ハーディ研究』において明示されたロレンスの芸術論とともに「虹」という用語の哲学的特性がより明確化され、その特性を『虹』の物語の結末でアーシュラの前に現れる「虹」——自らを〈真理〉に関係させる新たな人間存在=実存(反復)——として描出することでロレンスが形而上学を「活動」させようとする過程を明示する。

キルケゴールやニーチェと同様、ロレンスにとって形而上学を動かす目的が、ヨーロッパ世界における旧来の価値の批判および新たな価値の定立であるならば、その目的は彼の芸術創作を介してどのように遂行されるのか。この問題に対して一つの見解を示すことで、本発表の結びとする。

シンポジウム 1

〈日本オーウェル協会・日本ロレンス協会 合同シンポジウム〉

オーウェル、ロレンスと政治

司会 高村 峰生

ジョージ・オーウェル『空気を求めて』と D. H.ロレンスの小説 ——階級問題と共産主義

近藤 直樹

ジョージ・オーウェル (George Orwell, 1903-50) は D. H.ロレンスを批判したこともあるが、総じて彼を敬愛し、特に彼の短・中篇小説を高く評価した。これは 1945 年発表の書評にある、「[[狐] (“The Fox,” 1922) は] ロレンスが書いた中でおそらく最高のものだろう」という一節によくあらわれている。実際、オーウェルはロレンスから少なからぬ影響を受けており、この点に着目した研究も散見され、たとえばジェフリー・マイヤーズ (Jeffrey Meyers) は、オーウェルの小説『牧師の娘』 (*A Clergyman's Daughter*, 1935) とロレンス作品の自然描写の間に共通性を見出している。しかし、両文学者の比較研究にはまだ開拓の余地があり、たとえばオーウェルの小説『空気を求めて』 (*Coming Up for Air*, 1939) には、ロレンス作品への直接・間接的な言及があるにもかかわらず、その意義については十分に検討されてこなかった。本発表では、『空気を求めて』を、作品内で言及されるロレンスの「プロシア士官」 (“The Prussian Officer,” 1914) などとの関係に注目して読み直し、特にオーウェルとロレンスが小説で描いた階級問題と共産主義について考察し、両者の近さと遠さを明らかにしたい。

D. H. ロレンスとジョージ・オーウェル ——政治といふ営みに対する態度

大江 公樹

ジョージ・オーウェルは『鯨の腹の中で』において、D.H.ロレンスら 1920 年代に活躍した (とオーウェルが見做す) 作家の作品について、「狭い意味での政治が無い」と指摘した。確かに、スターリン体制下のソ連を批判する『動物農場』、『1984 年』などの小説や、時事評論を多く書き、政治対立の場に斬り込んで行つたオーウェルと比べると、ロレンスの諸著作と政治との間には距離がある。無論全ての言説に政治性を見出すことは出来るであらうし、例えば小説であれば『カンガルー』のやうに背景として政治が描かれた作品もある。が、どう行動すべきかといふことになると、個人と社会の有機的繋がりを希求した『黙示録論』の最後の「まづは日輪と共に始めよ」といふ言葉に象徴されるやうに、思想の政治的方向性は読み取り難くなる。しかし、ロレンスの思想は、政治といふ営みとどうかかはるべきかといふ態度の問題について、重要な思考の基盤を与へ得る。例へば、オーウェルと同様 1940 年代に全体主義といふ問題に直面しつつ、執筆活動をしてゐた福田恆存は、集団的自我と個人的自我を区別するロレンスの『黙示録論』の思想を発展させ戦後日本の政治文学論争に加はつた。ここでの政治と文学の目的を峻別する福田の考へは、文学的忠誠心と政治的忠誠心の混同を退けるオーウェルの主張に似る。本発表では、1940 年代の福田の言説に、現実の政治に対してロレンスの思想がとり得る姿勢を見出し、オーウェルによる態度と比較したい。

トランプ時代にジョージ・オーウェルとジェイソン・スタンリーの ファシズム論を併読する

高村 峰生

前トランプ政権時に国土安全保障長官、大統領補佐官を務めたジョン・F・ケリーはトランプを独裁主義者であり、ファシストであると今回の米国大統領選挙期間中の2024年10月に述べていた。2025年1月にトランプ政権が誕生してからの矢継ぎ早な大統領令による統治は、まさにこの発言を裏書きする形になっている。*How Fascism Works: The Politics of Us and Them* (2018)や*Erasing History: How Fascists Rewrite the Past to Control the Future* (2024)といったファシズムについての著作のあるジェイソン・スタンリーは、現在の米国は「ファシズムに陥る可能性がある」としてトランプ政権の言論統制を強く批判し、イエール大学からトロント大学への異動を表明した。このような現在の政治状況において、オーウェルの“*What is Fascism*”を中心にファシズム論を——スタンリーのファシズム論と併せて——読むことがどのような批評的意義を持ちうるか考えたい。前回の大統領時にトランプがホワイトハウス内で「ヒトラーは良いことした」と発言していたとされ、今回の大統領就任時の演説でイーロン・マスクが「ナチス式敬礼」をしたという現在の世界に、オーウェルとスタンリーの批評はどのようなインパクトを持ちうるか。

シンポジウム 2

E. M. フォースターと D. H. ロレンス

司会 加藤 彩雪

E. M. フォースターと D. H. ロレンスは同じ時代を生きたにも関わらず、比較考察されることが比較的少ないペアと言える。フォースターは、ヴィクトリア朝の文化や歴史的な文脈の中で論じられたり、モダニズムの枠の中ではウルフをはじめとするブルームズベリーグループとの文学的な邂逅について多々言及されたりするものの、ロレンスという観点から考察されることは意外と少ない。確かに、両作家の階級や文体に着目すると、2人の距離は一見隔たっているように思われる。

しかし、フォースターとロレンスは1915年にオットリン・モレルを介して知り合ったのち、度々手紙のやりとりを交わしていた。それらの手紙からは、両者が互いのテキストを読んでいたという事実を伺い知ることができる。ロレンスは、フォースターのテキストを痛烈に批判することはあったものの、「ラナニム」と自身で名付けた理想の共同体形成の計画について、フォースターに手紙で告白したことがあった。ロレンスのラナニム形成の夢は頓挫したものの、その共同体にフォースターが参加することを彼が願っていたという事実は、ロレンスがフォースターに対して「響き合う何か」を感じていたことを物語っている。一方でフォースターが、ロレンスが1930年に亡くなった際に、彼を“*the greatest imaginative novelist of our generation*”と評したことはよく知られた事実である。さらに、フォースターは、チャタレイ裁判における最終弁護人の1人でもあった。これらの事実を考え合わせた時、フォースターとロレンスのテキストを比較考察し、互いのテキストに遺し合ったものについて探っていくことは、モダニズム研究において意義のあることであると考えられる。

そこで、本シンポジウムでは、フォースターとロレンスが「共通項を持っていたのではな

いか」という問いに対して、3人の講師が各々独自の視点から報告を行う。両作家が意識の終末世界を描く上での重要な表象の1つと考えたものは何か、“the old stable ego”(「旧来の安定した自己」)を脱ぎ捨てたのち、両作家は自己の基盤をどこに求めていったのか、同性愛に関連するフォースターの作品の背後にはどのようなロレンスの影響があったのか、ということについて具体的に考えてみたい。また、響き合うもののみならず、両者の相違点も明らかにさせ、その意味についても議論を行う予定である。

フォースターとロレンスの創作上の一致 ——意識の終末世界に視える女性の表象について

大山 美代

人間が機械に洗脳されたディストピアの世界を描いたE・M・フォースターのSF小説“The Machine Stops”(「機械は止まる」、1909)と、ロレンスの“The Prussian Officer”(「プロシア士官」、1914)は、物語の内容こそ全く異なるものの、どちらの作品にも、主人公の若い男性(クーンと従卒)が生と死の狭間をさまよい、幻視的光景を見るという場面が描かれる。その際に両主人公は、朦朧とした意識の中で「ある女性」を目撃する。その女性が何者であるかについては明らかになることはなく、台詞もなければ、その後の展開に大きな影響を与えることもない。しかし、両作品ともにほぼ二人の登場人物(母親と息子、大尉と従卒)だけで物語が進行していき、それゆえに二人の過度に緊密な(あるいは希薄な)関係性が焦点となる中で、このような正体不明の女性が一瞬だけ登場する仕掛けには、注目すべき意味があるのではないだろうか。

本発表では、二つの作品に現れる女性像を、フォースターとロレンスが意識の終末世界を描く上での重要な表象の一つとしてとらえる。また、女性は実在する人間ではなく、クーンと従卒が見た幻覚の一部であると解釈し、究極の状態において彼らが新たに得た認識を視覚的に具現化したものが、女性という表象として表れている、という仮説を立てて、解釈の可能性を探っていく。二つの小説におけるこの創作上の一致から、両作家の新たな共通項を見つけてみたい。

E. M. フォースターとモダニズムの展開における位置 ——“the old stable ego”の先にあるもの

加藤 彩雪

フォースターが初めて執筆した短編“The Story of Panic”(「パニックの話」、1904)では、牧神に遭遇した近代人の反応が、ファンタジーの要素を交えながら独特の語り口で描写されている。ロレンスのテキストにも同様に、牧神と思われる「他者」との遭遇が描かれるものの、フォースターの描く牧神への人間の反応は、ロレンスのそれと比べて肯定的とは言い難い。他者との“connect”に物語の主軸を置きながらも、他者との触れ合いによって、自我が揺さぶられることに対して、フォースターは非常に慎重な態度を見せていたことが分かる。ロレンスが1914年にエドワード・ガーネットに宛てた手紙の中で、“You mustn’t look in my novel for the old stable ego of the character. There is another ego, according to whose action the individual is unrecognizable,…”と述べたことは有名であるが、「旧来の安定した自己」からの脱却後、ロレンスとフォースターは、どこに人間の存在の基盤を求めていったのだろうか、本発表で考えてみたい。また、自己への関心をめぐる同時代の他の作家の思想にも言及することで、モダニズムの展開における2人の位置や距離について明らかにさせたい。

本発表ではまず、ロレンスが1915年にフォースターに宛てた一通の手紙を取り上げ、1915年時点では両者が互いに距離を持っていたことを指摘する。また、そのことがどのようにフォースターの物語に映し出されているのか考察する。そして、その後のフォースターの思想の変化を、30年代以降に書かれた随筆や彼が積極的に参加したBBCのラジオ放送でのトークを手掛かりに追っていくことで、ロレンスの影響や類似点について考えていきたい。

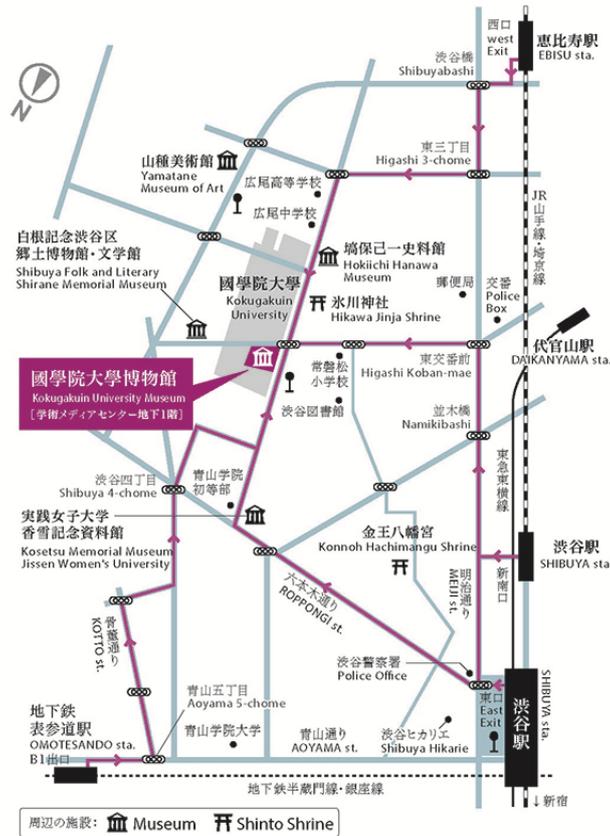
E. M. フォースターのゲイ・ナラティヴとD. H. ロレンス

田島 健太郎

周知の通り、E. M. フォースターにとってホモセクシュアル／ホモエロティックは必然的な重要性を帯びる主題である。1879年に生を享け1970年に没したフォースターの生涯を通じて、同性愛を肯定的に表現する『モーリス』、「永遠の生命」など数篇の作品を公刊することは事実上不可能であった。その間、ホモセクシュアル／ホモエロティックなものの意義の追求（本発表でいうゲイ・ナラティヴの構築）は晩年に至るまで、いわば彼のライフワークとして細々と継続されることになる。この個人的なプロジェクトの道程にしばしば交差するロレンスの影に、本発表では迫ってみたい。ロレンスの処女作『白孔雀』（1911年）を読んだフォースターは1915年の手紙において、ロレンスが有名な沐浴の場面で無自覚のうちに同性愛の賛美的な描写を敢行したことに驚嘆し、この作品を「潜在意識の極めて奇妙な産物」(the queerest product of subconsciousness) と評している。ロレンスのホモセクシュアル（＝アイデンティティ）／ホモエロティック（＝経験）に対する姿勢は、前者への苛烈な攻撃と後者への象徴的な憧憬が混交する曖昧なものだが、上のようなフォースターの評言は、同性愛者としてのアイデンティティを持たなかったがゆえに逆説的にホモエロティックの表現を自由に行い得たロレンスへの羨望さえ窺わせる。本発表では同性愛に関連するフォースターの作品を取り上げ、ホモセクシュアル／ホモエロティックの領域におけるロレンスとの影響関係について検討する。

國學院大學渋谷キャンパスまでのアクセス

渋谷駅から徒歩 13 分、表参道駅から徒歩 15 分、恵比寿駅から徒歩 15 分



渋谷キャンパスマップ



※ 大会会場の教室未定。追って事務局から全体メールにてご連絡します。

大会会場周辺ホテル情報

國學院大學最寄り駅（渋谷駅）周辺のホテルは、以下の通りです。

【國學院大學渋谷キャンパス周辺のホテル】

- ホテルグラフィック渋谷（HOTEL GRAPHY 渋谷）
〒150-0011 東京都渋谷区東 1-29-3 TEL: 050-1720-2301

- 東急ステイ渋谷新南口
〒150-0002 東京都渋谷区渋谷 3-26-21 TEL: 03-5466-0109

- ドシー恵比寿
〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿 1-8-1 TEL: 050-1807-2324
（カプセルホテル。女性専用フロアあり）

- JR東日本ホテルメッツ渋谷
〒150-0002 東京都渋谷区渋谷 3-29-17 TEL: 03-3409-0011

- 渋谷東急REIホテル
〒150-0002 東京都渋谷区渋谷 1-24-10 TEL: 03-3498-0109

- プリンス スマート イン 恵比寿
〒150-0022 東京都渋谷区恵比寿南 3丁目 1 1番 2 5号 TEL: 050-3161-9550

- セルリアンタワー東急ホテル
〒150-8512 東京都渋谷区桜丘町 26-1 TEL: 03-3476-3000

- WANDER Tokyo shibuya（最寄り駅：田園都市線池尻大橋駅）
〒153-0044 東京都目黒区大橋 2-22-7 TEL: 03-6452-3313

- オリピックイン渋谷（最寄り駅：田園都市線池尻大橋駅）
〒153-0044 東京都目黒区大橋 2-22-6 TEL: 03-3469-5050